奇妙な家族とその周辺の非日常が日常になってしまった今日この頃

しらお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
奇妙な家族とその周辺の非日常が日常になってしまった今日この頃

【Ｎコード】
Ｎ３０７４Ｘ

【作者名】
しらお

【あらすじ】
現代日本を舞台に、半龍半人の少年が、濃い家族に振り回されつつ、非日常になりつつある毎日を生きていく。
頼承軒という店がある。そこは、いろいろな頼みごとを請け負い、依頼人の願いを叶える店だ。
そこで働く逆代梓は、今日も店主である父に厄介事を押しつけられる。

むかしむかしのこと（前書き）

携帯サイトでも連載中です。内容は同じです。

むかしむかしのこと

怪談や怖い話が積極的に信じられたのは、小学生の時だというのは、誰しも同じだろう。好奇心旺盛で面白い何かがしたいと思う彼らにとって、肝試しというワードは魅力的だ。

±±±

小学生だけで向かうには少し危険に感じるそこは、夜でも昼でも変わらず薄暗い破れ寺だ。今時珍しいぐらいに広がっている薄野は、どこか妖しげで、綺麗なのだが微かに恐怖を感じた。

「あずさ、次だってさー」

ここに連れ出してきた張本人が嬉しそうに声をかけてくる。だが、逆代梓（さかしろあずさ）はしかめ面しかできなかった。

あまり薄暗い場所には入るなよ――。

言いつけを破るととんでもないお仕置きをしてくる父親の言葉が蘇った。理由は何も言ってなかったが、守らなければいけないことだろう。傍若無人な態度ばかりだが、梓を大切にしてくれていることぐらいは分かっていた。

「ねぇ、帰っちゃダメ？」

そう聞けば、友人は泣きそうな顔で否定した。そういえば、彼は極度の怖がりだった。梓は、一人で行けないほど怖いなら、肝試しなんてやめればいいのにと思う。が、怖がりの怖い物好きという言

葉が思い浮かんで、顔が渋くなった。

「あずさ、ゆうき。じゅんばん来たよ」

帰ってきた数人から、肝試しに必要な懐中電灯を貰い受け、さっさと歩き出す。ペアの相手も、慌ててついてくる。怖くて仕方ないようで、梓の手を力一杯握りしめてきた。

「そんな怖がらなくても大丈夫だよ」

「でも、ここ出るっていうし…」

ヨーカイとかユーレイだったら、もうでてきてるよ。そんな言葉が滑り出てきそうだったが、無闇に怖がらせれば被害を被るのは梓なのだということを思い出して寸前で止める。

なんで、みんなには視えないんだろう。梓は不思議に思う。破れ寺の入り口には既に人魂という青い炎がゆらりゆらり浮かんでいる。腐りかけ、草が生え放題の門から見える中でも、肉の塊が歩いていたり、破れて目がついた提灯が揺れていたり、二本足で歩く狸が僧衣に袈裟をきて闊歩している。だが、怖がりの友人には視えていないらしい。

「……まだ出てこないよね」

適当に返事をして、門をくぐった。彼らに必要なのは、墓の奥に置いてきた鉛筆だ。

小学校にあがって気付いたのだが、どうやら逆代家しか見えないものがあるらしい。それは、父親の言葉から推測するに、妖怪や幽霊といった不確かなモノたち。霊視能力は、大小の差はあれど視ることができる人間はたくさんいるが、まだ狭い世界で生きている梓

にとって視る能力は彼の生家に限定されていた。

父の言葉にある『薄暗い場所』とは、屋内のことという希望的解釈をして、墓場に向かった梓。引きずるようにして友人を連れ、目的のものを取った。

――ねぇ、遊ばない？

さぁ、帰ろう。そんな言葉が出てくる前に響いた声。二人の声ではなく、鈴を転がしたような少女の声。

油の切れたロボットのようにゆっくりと振り返る二人。

――遊びましょ

時代がかった服を着た、血まみれの女の子が立っていた。

「「うわあああああっっ！！」」

鈴のような声が響いたと同時に二人は駆け出す。鉛筆を握りしめたまま、門目指して一直線に。だが、眼前に現れた屍肉に行く手を阻まれる。梓は、ターンをして逃げ出した。そういえば、裏側に子供一人分の穴があったと思い出し、そこへ向かう。

――おやおや、美味しそうな子供じゃの

突如上から降ってきた、からからと笑う提灯お化け。開いた穴にたどり着く前に現れたそれは、小学生を驚かせるには十分だ。

「ひっ」

ひきつった声を出し、もう一度Uターンしようとすれば、今度は肉の塊。気付けば、前後左右全てを妖怪やら幽霊やらに取り囲まれていた。

――ふふ、よい香りじゃ。もう一人は逃したが、まぁよいじゃろう

――人間っぽいけど、なんか違う？

――変な感じがするなぁ、確かに

――水気（すいき）がする。半分は知らない匂いだ。美味そう

――まぁよい。喰ってしまおう

その一言で、ざわめきが熱気を帯び始める。頭、目玉、腸、手、指など食べる場所の指定が始まり、梓は逃げ出したいのに逃げられなくなる。足が竦んで動けない。殺される、食べられる。そんな思いに捕らわれ、身じろぎすら難しい。

だいたいの取り分は決まったらしく、真正面に立つ子供がにたりと笑った。ひくっと喉が鳴り視界が滲み、頼れる背中を思い出す。何度となく護ってくれたあの背中。絶世の美貌にニヒルな笑みを浮かべ、赤い目を光らせ、常に自信満々、傲岸不遜、天上天下唯我独尊な彼。

お父さん――っ！！

この場にいないその人を呼んだ。

「てめぇら、そこにいるのが俺様の息子だって知って喋ってンだろうなァ？」

ここにいないはずの声が響いたのは、すぐだった。

ずっと目を開いていたはずなのに、いつのまに現れたのか、梓には皆目見当もつかなかった。いつもの白いTシャツとジーンズではなく、どこかの軍隊のような服装。全身がモノクロで構成されていて、腰についた布がふわりと風に揺れた。

「おと、さ…っ！」

視界が滲んで、目の前の背中が歪むのも構わずに、梓は夢中で黒い衣装を掴んだ。

「おう、助けにきたぞ」

深く優しさが滲む安心できる、低い声。涙腺が崩壊した。

「あ〜、まだ泣くなって…」

困惑した色が混ざるそれに、さらにぼろぼろとこぼれていく。どうやら止まらないようだ。

彼は、苦笑すると梓の体を片手で軽々と抱き上げた。あやすように手でリズムをとる。片手に持っていた薙鎌（ないがま）は離さない。周りは未だに敵だらけなのだ。

――え、不倶戴天（ふぐたいてん）……？

――焔龍（えんりゅう）…ッ！？
――あの噂は本当だったのか

ざわざわと騒ぎ出す周囲の化け物。恐怖に彩られたそれらは、さっきまで子供を脅していたようには思えない。

「ここは、噂がなかったから放っといたんだが…」

最近の噂までは手が回らなかったらしい。確かに彼らの噂を聞いたのは、数時間前程度だった。これから広まるところだったのだろう、教えてくれた友人は耳聡い子だから。

――しかし、なぜ…
「あ？　てめーら耳あんの？　こいつは、俺様の息子だ」
――では、半龍…道理でおかしな匂いだと…

さっきまでのただ怯えている空気とは違うことに気付いた梓が、ようやく涙の止まった顔をあげる。不思議そうに周りを見た。父親という最強の盾を手に入れたからか遠慮のない視線だ。それに怖じ気づく化け物に、梓は、さらに目を見張る。

「さて、こいつを食う気はなくなったな」

化け物たちは、がくがくと壊れたように首を振る。振り子人形のようだと不思議な形をした彼らを見て思う。

「よし、じゃあ帰るか」

片腕にしがみつく幼い子供の頭を撫で、踵を返す。それを止めたのは、小さな子供の霊。

――あ、あなたは、本当に焔龍さまなのですか

小さく問いかけられた言葉に、微笑する彼は鷹揚に手をあげた。そして、彼らの姿は父の跳躍により一気に遠ざかっていった。

±±±

「アズ、知りたいか」

「うん」

夜空を中空で歩きながら、まるでそこに透明な床でもあるかのようにしっかりと歩きながら、青年は唐突に言った。梓は、ぐるぐる回っていた疑問を言い当てられたことに驚いたが、おそらくこうやって秘密を目の当たりにした人はたくさんいたのだろうと気付いて、か細い声で頷いた。

「そうか、そうか。なら見せないとなぁ」

「え」

父のどこか固い声が聞こえた瞬間、抱え込む腕が変わった。一瞬の出来事だった。目を閉じた間に景色が変わってしまった。

《俺様はなぁ、龍なんだよ》

鉤爪をもち鱗に覆われた、明らかに人の腕とは違う、あえて例えるならば蜥蜴のような腕が、軽く梓の体を握りしめ、空中へ放る。一気に回転していく視界に、悲鳴もあげられずに下っていった。

ぽすんっ

少々間抜けな音を響かせて、梓は柔らかくて暖かいものの上に落ちた。慌てて周りを見れば、前方に大きな角と耳、柔らかなそれは炎のような鬣で、周りは赤い鱗に覆われている。後ろを向けば、長大な雲か煙のようにうねり曲がり飛んでいる蛇に手足を加えた姿。

龍。その言葉がすとんと納得できた。

《アズ…》

「なんか、よく分かんないけど…かっこいい…っ！」

何かの文様が浮かんだ赤い鱗と黒い鬣、所々にサンスクリット語によく似た文字が刻まれた布が巻かれている、父の姿。テレビやアニメで見た龍という存在が父親として目の前にいる。それがすごく嬉しかった。

《お前なぁ…》

呆れたような安心したような色を滲ませた声。

《肝が据わってるな》

まぁ、今まで妖怪や幽霊やらを見てきたんだ、怖がる驚くより先に興奮するものかもしれない。移り変わる夜空と心地よい風にはしゃぐ息子を見て、思考を切り替える。

今夜危ない目に遭ったのは、明らかに父親である逆代真が原因だ。周囲に棲む妖怪どもには警告をしておき、かつ、梓にも忠告しておいた。だが、それはたまに効かないようだ。今回でそのことを痛感

した真は、明日から対策をしようと決めたのだった。

「おとーさん、おとーさんっ！」

《おう》

「回転回転ーっ！」

すっかりアトラクション気分なのか、梓は注文をつけだした。どうやら空飛ぶジェットコースターと見られている。意外と適応力の高い息子に、苦笑して上下半転を行った。

±±±

今思えば、この日が境だったのだ。梓は、新しい萩谷高校（はぎやこうこう）の制服に身を包み、たまたま目に入った小学校を振り仰ぐ。小学生の思い出と言えば、妖怪に襲われたことと父親のスパルタだ。あの日の翌日から梓は父にしごかれ始めた。それはもう、大好きだった父親を嫌いになるぐらいに。

「懐かしいなぁ」

あれ以降、肝試しには参加しないと決意したんだった。あまり意味がなかった決意だったけど。くすくすと微笑いながら小学校を後にする。

初日から遅刻はごめんだった。

むかしむかしのこと（後書き）

名前は出なかったけど、つながりありますよ。あっちと。

引き金とは、いつのまにかおろされているもの

『黄色い家』と呼ばれる廃墟が存在する。そこは、典型的な幽霊屋敷として有名だった。話としては、誰もいないはずの部屋から女の子のすすり泣きが聞こえたり、どこかからボールが転がってきたり…とまぁ、どこにでもあるもの。しかし、実際に遭遇すれば気味が悪いのは当たり前。幽霊などを見ない人間にとっては、不可解なそれらは、本能的な恐怖となる。

「だからさー、おとなしくしてくれって話」

茶髪に茶色の目、平均的な顔立ちで少し小柄だが俊敏そうな雰囲気の少年。彼が目を眇めて睨むのは、何もない空間。他人から見れば、彼は精神病患者だろう。だが、彼の目には、違うものが映っていた。

小さな女の子と男の子が二人。ふわふわの耳としっぽがぴょこん、と動かされる。赤みがかった茶色のそれらは、本物らしくぴくぴくしている。むー、と不満そうな顔をした彼らは、二人で顔を合わせる。ぎゅっと二人で手を握り、しっぽを重ねる。不安そうに二人でじっと考え込んでいる。

「次に住むところは、こっちが保証するから」

仕方ない、と溜息をついて付け足す。信じられないのか、「本当に？」「本当に？」と何度か聞いてきた双子。だが、しっかり頷く梓を見て、二人は手を叩きあって喜んだ。

面倒くさいの増えちゃったなぁ。彼は、そうぼやく。

「店長さーん、俺、梓（あずさ）ね。間違って消すなよ？　五月十日丑の刻三

つ、依頼終わったから帰るわ」

携帯で登録された番号を呼び出し、留守録を残す。無理につなごうとすれば、後で鉄拳制裁が待っているからだ。時刻は、午前二時半。ほとんどの人間が眠る時間帯だった。ディスプレイに映された「頼承軒」という文字に、双子が反応する。てててて、と走って彼の手にある言葉を確認した。

「頼承軒(らいしょうけん)？」

「どっかで聞いたことあるねー」

「うん、でもなんだっけ？」

「何でも屋だよ。今回もここの管理人さんに依頼されて来たんだ」

「この前買った土地がいわくつきで困っている。原因を割り出して排除してくれ」、それが契約内容だった。噂を聞いてやってきた管理人は、こんなやつにこれを任せて大丈夫だろうかと胡乱げな表情をしていたが、それも仕方ないだろう。

彼の相手をしたのは、逆代梓(さかしろあずさ)。現役高校男子だからだろう。まぁ、拝み屋に年齢は関係ないんじゃないのかとは思うが。頼承軒は、「幽霊・妖怪などの退治も請け負ってくれる、不思議な拝みどころ」のような働きを持っている。他にも請け負っているが、そういった関連の依頼が多いのは、口コミで評判が広がる体制だからだろうか。

「頼承(うけ)軒は、あんたたちからも依頼を請ける。よかったら使ってくれよ」

「「へぇ…、わかった。困ったら呼ぶよー」」

頼承軒には、もうひとつ特徴がある。それは、妖怪・幽霊などと俗に人間にとっていないものとされている彼らからも、依頼を請けることだ。これは、立ち上げた理由や店主の素性からくる特性なの

だが、彼らに説明する必要はないだろう。彼らは、依頼してきちんとそれを遂行してくれれば素性なんて構わないのだ。

とりあえず、今の最優先事項は、ここから抜け出すことだ。もちろん、双子をつれて。双子が、幽霊屋敷と呼ばれた原因なのだから、連れて行くのは当たり前だろう。

着物姿の双子を抱きかかえ、壊れた窓から身を乗り出す。周りに人の気配がないことがわかると、慣れた動作で中空に飛び出す。双子がきゃーっと盛り上がる声を耳元で聞きながら、地面に難なく着地。すぐさま立ち上がり、不審人物と認定されないようにそろそろ動き出す。今は深夜。空き家で幽霊屋敷と呼ばれているが、一応持ち主はいるのだ。怪しまれないように目立たないように慎重に行かなければならなかった。

双子の狐と、霊が見える少年は、夜道を歩いていく。

翌日。逆代梓は、眠っていた。淡いグリーンで色が統一されたそこは、彼の部屋だ。そこかしこに修復の後が残り、床に転がる教科書やCDに漫画本、半開きになった備え付けのクローゼットから見えるのは、適当に突っ込まれた衣服の山。乱雑な印象を与えるそこに、ひとつの気配が訪れる。音もなく扉が開き、ベッドの中の人物めがけて、あるものが振り下ろされた。

寸前で、梓は転がって床下に逃れる。その勢いのまま今度は前転した。一瞬のちに、さっきまで彼がいた場所に鋭い何かが突き刺さる。彼は、それに気付くと、前転する勢いを利用して足元にあった分厚い漫画雑誌を掬い上げる。足によって放られたそれは、狙いたがわず襲撃者の顔を襲う。が、襲撃者は淡々と雑誌を弾いてさらな

る攻撃に移った。梓が体勢を整えようと動き出す。その瞬間を狙って、過たず蹴りが放たれた。

「……アズ、今日は鈍いな。なに、体調悪ぃの？」

心配しているような言葉なのに、襲撃者は少年の背中に足を乗せ体重をかける。半開きになったカーテンの隙間から、光が室内に届き、襲撃者の姿が浮かび上がった。

仮面のように右目を覆う、のばされた前髪に首元までしかない後ろ髪、髪の黒に対して健康的な白い肌が映え、ただのTシャツにジャージという一般的な寝巻の恰好をしているのに、ワイルドな美貌をもち、それすらブランド品のように見える青年だった。彼の、まるで造られたかのような美貌の中でも極めて印象的な、真紅の瞳が、揶揄するように細められる。足の下の少年は、あっけなく転がされたことに文句を言わず、ただ無言で足の下から抜け出した。捕まえておくつもりはなかったらしく、あっさりと外れたが、少年は、油断なく起き上がる。

「体調悪かったら止めてくれるわけ？　クソ親父」

一般より大きめの琥珀の目を眇めて、苛立ちを込めて青年…彼の父を睨む。それに、青年はイイ笑顔でまっさかー、いつもよりサービスしてやンよと返した。アズ、もとい逆代梓は、そんな父の様子に溜息をついたのだった。

「梓（あずさ）、真（しん）！！　いい加減にして、ご飯食べなさい！！！」

十分後。続く騒音に対し、母が強制終了させた。「おう、今いくー」嬉しそうに返事をして、今にも息子の顔に拳をめりこませよう

としていた父は、腹が立つほどの速さで階下へ降りて行く。母の一言がなければ、確実に顔面パンチを食らってノックダウンしていただろう梓は、切り替えの早さにもう一度溜息をついて、自身も下へ降りていこうとした。

ぎゅむっともふもふに抱きつかれなければ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3074x/

奇妙な家族とその周辺の非日常が日常になってしまった今日この頃

2011年10月26日11時20分発行